

37th National Conference 2014 in Las Vegas(NSCA National Conference 2014)における研究発表

杉山 敬*

はじめに

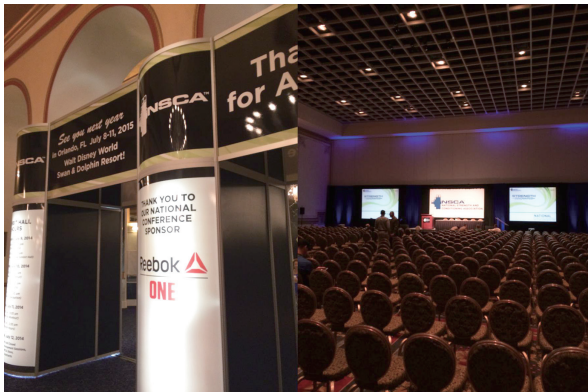
今回、平成26年7月8日～7月15日の日程で、アメリカ・ラスベガスにて開催された 37th National Conference 2014 in Las Vegas（以下、NSCA）に参加した。NSCAにて、これまでの研究成果の一部を発表する機会を頂いた。NSCAにおける学会大会の様子および発表内容を、ここに報告する。

NSCAについて

NSCAは、スポーツおよびトレーニング分野を専門とし、トレーニングやコーチングに特化した専門家の養成を目的とした組織である。当学会はトレーニングライセンスの発行を行い、世界中の指導者やトレーニングコーチ等に最新の科学的な知見を提供している。アメリカを拠点とする学会であるが、ヨーロッパや日本からもスポーツ科学領域の研究者および現場で活躍するトレーニングコーチや指導者が集まり、研究成果の発表およびディスカッションを行っている。今回参加した、第37回 NSCA 学会においても、口頭発表のみならず、ポスターセッションや実技を伴う講演、さ

らには企業の新商品や機材を実体験するコーナーもあり、スポーツ科学研究者やその学生、さらには運動指導およびコーチ等の参加者により非常に盛況であった。

学会は、一般発表を含む講演およびシンポジウム、ポスターセッションおよび協賛企業によるフロアでの実践や体験コーナーが朝7時から遅い日は夜9時まで行われていた。いずれの研究内容や報告も興味深いものが多く、自身の研究分野以外にも、コーチングやトレーニング理論など、さまざまな分野のプレゼンテーションを聞いた。また、ポスターセッションについては、研究に関する話はもちろん、現場での指導についても議論および情報交換することができ、非常に実り多いものであった。



学会会場の様子



体験コーナーの様子

研究発表について

学会大会1日目の7月9日は、Pre-Conferenceであったため、受付を兼ねて会場の下見を行った。2日目の7/10は、朝7時から Wake-up Workout なるセッションが行われ、その後さま

* 鹿屋体育大学 大学院 博士後期課程3年

ざまな講演やシンポジウムが順次行われた。私が行ったポスターセッションは、3・4日目に開催され、私は最終日の7月12日に発表を行った。今回の研究課題は「Asymmetry between the dominant and non-dominant legs in the kinematics of the lower extremities during a running single leg jump in collegiate basketball players」というもので、「バスケットボール選手におけるジャンプ能力の左右差」について検討したものである。シングルレッグジャンプ能力の左右差については、助走を伴わない報告は多数あるものの、より実践的な助走を伴うジャンプに関する左右差の要因は明らかにされていない。バスケットボール選手は、競技特性上、ジャンプ高を獲得するだけでなく、左右いずれの踏切脚においても同等のジャンプ高を獲得できることにより、競技を有利に進めることができる。しかしながら、選手の多くは左右差を抱え、パフォーマンスの左右差が10%を超える選手もいることから、その差の要因を検討し、パフォーマンスを改善するトレーニングや指導のための知見を得る一助とすることを目的とした研究である。今回の発表を通して、自身の研究内容の位置づけや研究データの有用性を再確認することができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。今回の発表を通して感じた点や議論した点を踏まえ、本研究の内容を海外雑誌に投稿する。

学会初日は、ネイティブの英語を聞き、理解することに精一杯であったが、学会や海外での生活を通して耳が慣れることにより、少しずつではあるが改善された。それも、英会話を積極的に行うため、学会での会話や学会外での現地の方々との積極的な英会話によるものだと感じている。しかしながら、語彙力や表現力はまだまだ向上の余地があるため、鹿屋に戻ってからさらなる飛躍のために、英会話および英語習得に向けて努力を継続させたいと強く感じている。

今後、研究者を目指すうえで英語力を向上させることは非常に重要であり、国際的にも認められる研究を行ううえで、国際学会にも積極的に参加

し、自身の成長につなげていきたい。

おわりに

今回、国際学会は初めてであり、多くの不安も感じていたが、渡米および学会を通して多くのことを学んだ。今後は、この経験を活かし、自身の研究活動をより実りのあるものとしたいと強く思った。今後、国際的に自身の研究を発信するためにも、英語能力、とりわけ英会話および英語表現の重要性を再認識した。今回はポスターセッションの発表であったが、ぜひともオーラル発表を行えるよう、更なる飛躍を図りたい。

最後に、今大会への参加・発表に、ご理解と多大なるご支援をいただきました前田明教授および共同研究者の皆様、本学職員の皆様に深謝致します。



Poster セッションの様子